育ちを支える共通の視点の検討が大切です

「架け橋期のカリキュラム」は、園と小学校が話し合いながら作成していきましょう。カリキュラムを作成することが目的ではありません。互いの保育・教育の質を高めるために、具体的な取組を共に見出していくという意識で取り組みましょう。

そのために、双方の先生が、気軽に話し合える関係を作っていくことが大切です。

往還

2 期待する子ども像を設定する

・期待する子ども像を明らかにする
・実施期間を検討する
（最低５歳児から小学校１年生の２年間実施）

3 期待する子ども像に関連がある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見出す

① 期待する子どもの姿や課題、校園の取組等について交流

指示されたことには一生懸命、真面目に取り組む。

期待に応えようと、頑張ることができる。

でも、経験していないことや答えがわからないことについては、失敗をおそれる姿がある。

自分の本音が言えないときがある。

迫りたいのは、「自立心」や「思考力の芽生え」。

② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見出す

③ 期待する子ども像を明らかにする

みんなの願いを具体的な子どもの姿で描き出すにはどうしたらいいかな。

抽象度の高い文言だと何を目指しているのか、ぼやけてしまう。

どのような子どもの姿なのかイメージしやすい文言がいいね。

取組を進める中で、文言の見直しをしてもよいかも。

決定！

心が動く、心をほぐす
～答えがないことでも、自ら考え、しなやかな心をもち、失敗を恐れず、行動する～（仮）

Point 「適応」から「創造」への転換

「架け橋期のカリキュラム」は、児童が受け身的に教師の示す規律に従って、小学校生活に適応していくためのカリキュラムではありません。一人ひとりの児童が主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かえるように考えていきましょう。

福井大学教職大学院
岸野麻衣 准教授 講話より

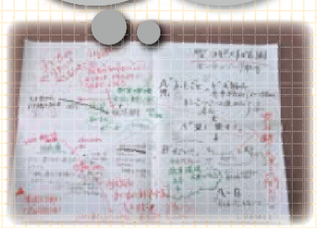
０歳から７歳における「大切にしたいこと」の手掛かり例

年齢	０歳	１歳	２歳	３歳	４歳	５歳	６歳	７歳
環境・単元の工夫（例）	・清潔で快適な環境	・ゆったりと落ち着いた環境	・じっくり遊びに向かえる環境	・友だちの存在を感じられる場や物の配置	・３、５歳児との関わりが生まれる場や物の配置	・試したり、工夫したりできる場や物の配置・時間	・子ども同士がつながったり、活動を生み出したりする教室環境	
	・感覚の働きを豊かにする遊び	・全身を使う遊びと指先を使う遊び	・一人ひとりの好きな遊びや興味に添った遊び		・ルールややりとりがある遊び		・年間を見通した合科的・関連的な学習	
	・感触や温度、音、大きさ、形など適切な玩具	・見立て遊びが充実するような用具	・同じ種類の用具や玩具の数への配慮	・遊びの中で出会う身近な自然や素材・材料・遊具	・イメージを広げられる様々な素材・材料・遊具	・本物らしさを追求できるような材料や道具	・試行錯誤のある活動を設定 ・児童の思いや願いを生かし、豊かな表現活動のある単元	
先生の関わり（例）	・温かいまなざしと言葉かけ	・「自分でしたい」を見守り・支える	・友だちとの仲立ち		・見守り、必要な時に援助 ・幼児と共に考える・振り返る		・これまでの経験を踏まえ児童の力を引き出す	・気付きを促し、学びや成長を自覚できる支援
一人ひとりの子どもに応じた支援の例	・包み込まれる感触や五感を意識した関わり ・愛着形成のベースとなる安心感 ・愛情ある声かけ	・笑顔と声のトーンによる安心感 ・共同注意の形成をうながす（同じものを見て笑い合う等） ・肯定的な声かけ	・失敗を悪いことと思わせない受け入れ ・自立性を見守り挑戦できるようにする ・没頭できる時間を大切にする	・興味や疑問を見逃さない ・言語コミュニケーションをうながす（代弁する等） ・他に興味をもてるような声かけ	・試行錯誤するための働きかけ ・待つ姿勢と少し離れたところからの見守り ・周囲の状況を知らせたり、相手の気持ちを代弁したりする	・相手の気持ちの理解をうながす ・感情コントロールできた場面を見逃さずほめる ・他者との関わりの良さを価値付ける	・生活や遊びの中にも学びを仕組む ・興味・関心を大切にする ・できないことではなく、できるようになったことに着目できるようにする	・わからないこと、できないことを認める ・成果や成長を可視化する ・取り組もうとする気持ち、失敗から学ぶ気持ちを大切にする

4 期待する子ども像の育成に向けて、大切にしたいことを共有する

・環境・単元の工夫
・先生の関わり
・一人ひとりの子どもに応じた支援　等

「大切にしたいこと」ってどうやって見出したの？？



遊びや学びの姿を改めて捉え直し、共通の「大切にしたいこと」を見出す

施設類型の違いを越え、共通の「大切にしたいこと」を見出すために、まず、各校園で展開されている遊びや活動を描きだし、子どもの学びの姿を改めて捉え直しました。そして、交流し、共通している「大切にしたいこと」を見出しました。

また、互いの保育・教育で大切にしていることを共有し、幼児・児童の学びの姿に置き換えて考えることで、「大切にしたいこと」を見出した校区もあります。

カリキュラムを作成する過程が大切！

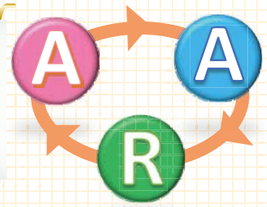
本リーフレットに示しているカリキュラムは作成途中のものです。「保育や授業を参観したり、事後研究会をしたりする中で再度検討しよう」、「完成を急ぐのではなく、みんなで話し合うことを大切にしよう」など、カリキュラムを作成する過程で互いの保育・教育の理解を深めています。

カリキュラムを作成するのがゴールではありません　… p.9 - 10 を参照

		5歳児			第１学年		
時期		４・５・６・７・８	９・10・11・12	１・２・３	４・５・６・７・８	９・10・11・12	１・２・３
期待する子ども像		心が動く、心をほぐす ～答えがないことでも、自ら考え、しなやかな心をもち、失敗を恐れず行動する～					
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	自立心	やってみてできたことや、うまくできなくて困った経験を通して、もっとこうしたいという思いが強くなっていく。	考えたり工夫したり、失敗したりを繰り返しながら、自分なりに最後までやってみようとする。	できた満足感や達成感から更に積極的に自分の考えを出し、自信をもって諦めずに取り組むことができるようになる。	自分でできそうなことを見つけて試したり、やり直したりしながら、新しい生活に慣れる。	経験したことをもとに見通しをもち、手ごたえを感じながら、できることを積み上げていく。	経験に基づいた見通しをたてて取り組み、達成感、満足感を味わい、自信を深める。
	思考力の芽生え	自分と友だちの思いや考えの違いに気付きながら色々な遊びや活動を楽しむ。	お互いの思いや考えを伝えたり聞いたりしながら、もっと楽しくしようと工夫するようになる。	グループやクラスで色々な考えを出し合い、違いを受け入れて新しい考えを生み出そうとする。	新しい生活や環境に慣れ、小学校の学習や活動に興味をもつ。	お互いの考えの違いに気づいたり、よさを感じたりして、ともに学ぶことを楽しむ。	ひとりで考えたり、友だちと考え合ったりして、物事を解決する面白さを味わい続ける。
大切にしたいこと	環境・単元	子どもが手に取り、自らやってみたい、もっとこうしたいと思えるような場の工夫	自分で見て触れて感動できる豊かな体験の積み重ね	友だち同士の関わり（異年齢交流を含む）が活性化する場づくり	期待感いっぱいの学びの環境	広がる　つながる　学びの環境	経験・既習したことを試しながら深まる自信・意欲
	先生の関わり	好きな遊びに夢中になれる時間や場を充実させるような関わり	共感的な受け止めと関わり	個の思いを認め、つなげる	入学までの体験を把握し、触れたくなる、すぐ試したくなる材料・用具の配置	広がりやつながりを生む、材料・用具の配置と教師の声かけ	グループやクラスで色々な考えを出し合い、違いを受け入れて新しい考えを生み出す関わり
	キーワード	やってみたい、もっとやりたい	様々な経験の積み重ね	友だちとつながる、深まる	知ってる！　やりたい！	もっと　もっとやりたい！	できたよ！もっとできるよ！

期待する子ども像に迫るためにカリキュラムをデザイン

5 5歳児のカリキュラムをデザイン 1年生のカリキュラムをデザイン

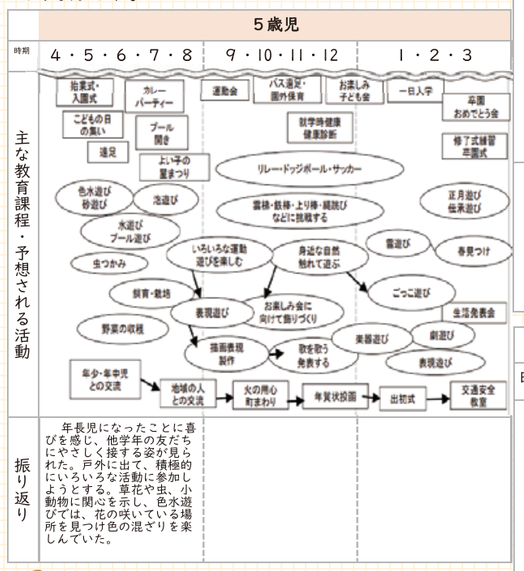


「カリキュラムを新たにつくらなければならない」ということではありません。

校園の保育・教育の形は違っても、期待する子ども像は共通しています。指導者側で綿密に計画を立てていくというよりも、子どもの姿を思いながら、どんな活動がどうつながっていく可能性があるか、子どもの動きに合わせて変更可能なデザインを考えておきます。

例えば、小学校では、生活科を中心とした合科的・関連的な指導を中心に記載するという工夫ができます。

校園の理念や校種が違っても、どのような活動の展開がありうるか、共有し合い、学び合い、より良い環境構成や援助を共に考えていくことが大切です。

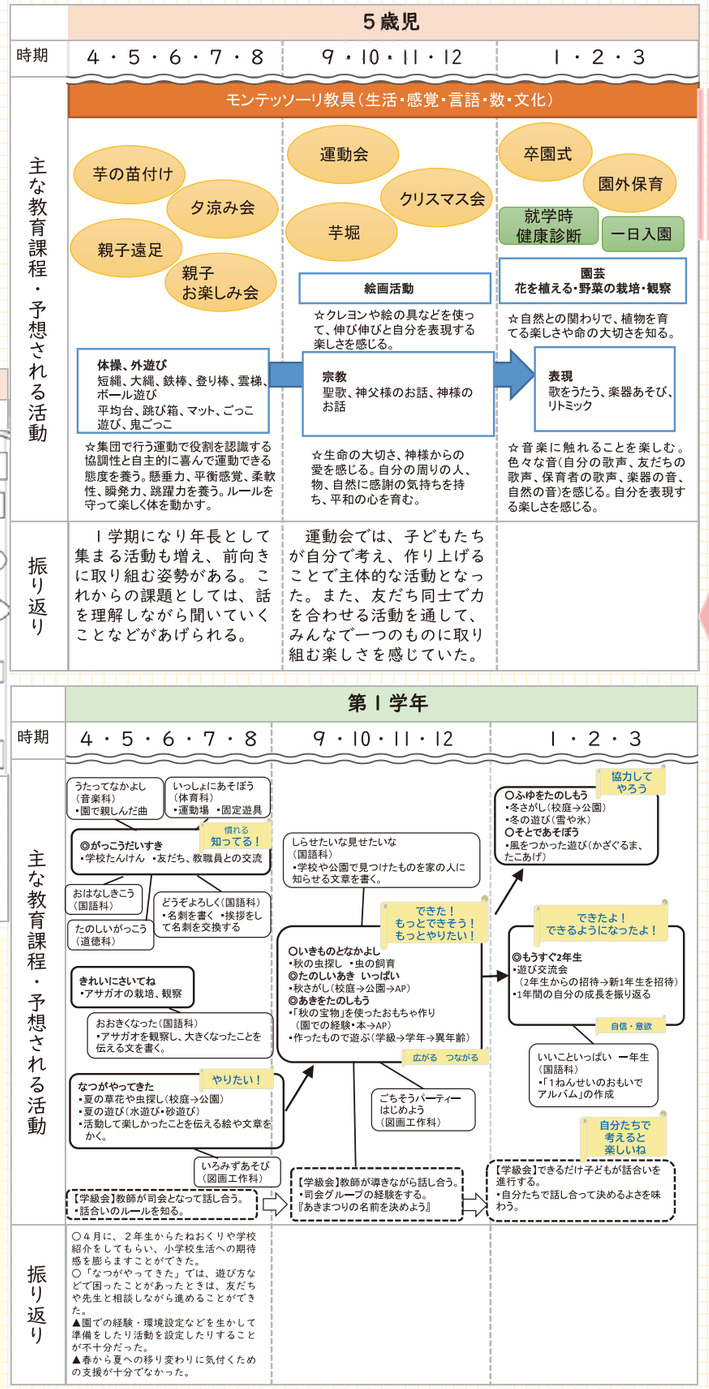


Point 「動的なカリキュラム」に

カリキュラムを詳細に作成しても、見直すことはなく、幼保小接続の取組が形骸化していることはありませんか。

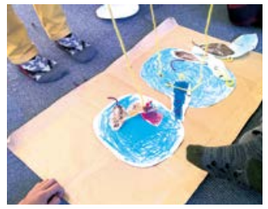
接続で大切なのは、子どもの育ちをつなぐことです。そのために、子どもの姿と願いを共有し、そこに向けて重点的な観点を共有し、活動をデザインし、“記録”し、さらなるデザインを考えていく。デザインと省察を往還するサイクルをもつ「動的なカリキュラム」を作成することで、持続的・発展的な幼保小接続となります。

福井大学教職大学院
岸野麻衣 准教授 講話より



「架け橋期のカリキュラム」は作成して終わりではありません

		5歳児
時期		9・10・11・12
期待する子ども像		心が動く、～答えがないことでも、自ら考え、
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	自立心	考えたり工夫したり、失敗したりを繰り返しながら、自分なりに最後までやってみようとする。
	思考力の芽生え	お互いの思いや考えを伝えたり聞いたりしながら、もっと楽しくしようと工夫するようになる。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 子どもの学びの姿		○運動会 ・運動会の練習に向けて、自分で活動の服装や集合場所、時間を確認して行動することができた。 ・組体操の活動では、自分達でどのように取り組んでいきたいかということを、考えて話し合い、「そら」をテーマにすることとなった。「浮いている飛行機」「プロペラが回るヘリコプター」「きらきらひかる星」など、子どもたちから出てきた発想をみんなで共有し、それを具体的に手を広げたり腰をかがめたり回ったりする身体の動きで表現していった。 ・例えば、「プロペラが回るヘリ」では、回る回数や方向、速さなどについて、どうするのが良いか、子どもたちが考えを出し合った。最終的には6回右回りで回って、最後はガソリンが減るのでゆっくり、回って止まり、バッテリーがなくなることを示すのにジャンプしようということになった。このように本番まで子どもが考えを出し合い、動きを修正しながら完成につなげ、本番も生き生きとした表情で楽しみ、自信をもって表現することができた。
他園・小学校からのコメント		どの実践も、難しいことを克服していく過程が、子どもをぐっと成長させている。 子どもが、難しいことを乗り越えるための手立てを記載すると、他の教員の参考になるのではないか。

		第1学年
時期		9・10・11・12
期待する子ども像		心をほぐす しなやかな心をもち、失敗を恐れず行動する～
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	自立心	経験したことをもとに見通しをもち、手ごたえを感じながら、できることを積み上げていく。
	思考力の芽生え	お互いの考えの違いに気づいたり、よさを感じたりして、共に学ぶことを楽しむ。
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 子どもの学びの姿		・生活科「たのしいあきいっぱい」の学習では、5歳児を招待するために、秋の自然物を使ったコーナーをグループで考えていた。 ・まとあてでは、もっとまとを作ろうというめあてを持ち、色や形にこだわって、トイレットペーパーの芯にペンで丁寧に色をつけ、細かく切り込みを入れて作っていた。 ・魚釣りでは、落ち葉を画用紙にテープで貼ったものを切り取り、魚に見立て、裏に「あたり」「はずれ」「おおあたり」と数字を書いていた。チームでは、計算するつもりだったが、Aは、「100000…000」とたくさん書いていた。気になった教師がチームに戻って「計算するのにこれでよいか」と確認すると、「これ点数何点？」「無限。無量大数」と応えていた。「当たりは100点までにして」と言われ納得しているようではあった。魚に毛糸を短めに貼り付け、「難しくした。」となかなか釣りにくくした工夫をしたBであった。それを友だちが苦労しながら釣り上げると「大当たりの大物！」と大興奮していた。 
他園・小学校からのコメント		記録から子どもの声が聞こえてくるようだ。写真があると、よりイメージしやすい。 幼児教育でも小学校教育でも友だちとの関わりが大切。

	5歳児
時期	4・5・6・7・8
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 子どもの学びの姿	<どうやったら水が流れるかな？> ・5月下旬、少しずつ気温も高くなり、水の冷たさや感触が心地よい季節になってきた頃、子どもたちは、砂場に穴を掘り、水を入れて「温泉」、「プール」を作り、全身で水や砂の感触を味わい楽しむ姿が見られた。次の日は、樋を持ち出し、水を流すことを楽しみ始めた。 ・最初は、樋を砂場に置いて水を入れていたが、傾斜がないので、水が流れない。「水が流れない！」「何で？」と水を勢いよく入れたり、いろいろな方法で試してみるが流れない。すると、同じ場に遊んでいた子どもがバケツを持ってきて、樋の端に傾斜をつけ水を流し始めた。「水が流れた」、「ここにも置いてみよう」、「ちょっとこっち持っておいて！」と、次々と樋を組み合わせて水を流すことに大成功！ ・「どうしてかな？」、「なんでだろう？」と試行錯誤して遊ぶ姿や「できた！」、「やった！」という達成感を遊びの中でたくさん経験していくことを大切にしていきたい。

「架け橋期のカリキュラム」は作成して終わりではありません。カリキュラムをデザインし、実践を記録し、さらにデザインしていく。その往還するサイクルを大切にしましょう。

モデル校園では、「実践記録」をもとに 「自立心」と「思考力の芽生え」に線を引き、子どもの姿を検討しました。互いの感想や考えを交流することで、共通点や相違点が見えてきます。そのことが互いの保育・教育の理解へとつながります。

Point 「どのようだったか」を描く

記録の際は、「何をしていたか」という活動内容を書くよりも「子どもたちがどのようだったか」に着目し、描き出すことで、子どもがどのような資質・能力を発揮していたのか着目することができます。

福井大学教職大学院
岸野麻衣 准教授 講話より

カリキュラムを作成することがゴールではありません

連携から接続へ

園と小学校の先生方が、関わりをもつことができるような取組を行うことで、顔がわかる関係性を構築することができ、幼保小接続を推進する体制をつくることが可能となります。そのことが、保育・授業の質的改善を図るための実践的な幼保小接続につながります。

以下に県内の取組を御紹介します。

知る

大人同士がつながることは知るための第一歩

保育・授業参観・研究会への参加

園内研究・校内研究に参加することで、幼児期に育まれた力が小学校教育にどのようにつながっているのか、園や小学校がどのような保育・授業の工夫をしているのかについて理解することができます。

保育参観では、園の先生が幼児の学びの姿や保育を解説してくださるので理解が深まりました。

授業体験会・出前授業

小学校に５歳児を招待して交流する形ではなく、授業を一緒に受けるという「授業体験会」を実施したり、小学校の教員が園へ出向き、出前授業を実施したりしています。５歳児は小学校のイメージができ、小学校教員にとっても幼児理解につながります。

受容

互いを認め合い取組の良さを取り入れる

やりたいを実現する環境構成

園では、子どもたちがやりたい！と思った時に自由に材料や道具を手に取ることができます。小学校でも、主体的な学びを支えていくために、やりたいときに、自分で始められる環境を整えています。

創意工夫したカリキュラムの作成

校区の実態を踏まえて、園と小学校が創意工夫したカリキュラムを作成することで、共通理解・共通実践につながります。

協同

「協同」心を合わせて共に考える

JRC発祥の地である守山小学校区は、JRC精神を基盤とした特色ある教育を実施しています。JRCの態度目標である「気づき、考え、実行する」をもとに、期待する子ども像を「気づき、考え、主体的に学ぶ」と設定し、校園の共通の取組を「心が動く・試行錯誤・伝え合う・振り返る」とし、保育・授業を展開しています。

園と小学校の共通の取組：振り返り

園

小学校

「学びに向かう力推進事業」研究指定校園における取組のまとめに「架け橋期のカリキュラム」を掲載しております。 … p.19 QRコード を参照

カリキュラムが詳細に作られていても、子ども同士の交流にとどまり、子どもの育ちをつなぐための幼保小接続になっていないということはありませんか。

変容

「変容」幼保小接続を通して保育者・教師の意識が変わり子どもの姿が変わる

保育者・教師の意識の変容

これまで、自分（保育者）の答えありきで保育を進めてきましたが、今年度は子どもにゆだねることを意識しました。そうすると、少人数やクラスでの話合いの中で、子どもたちが自分の想像を超えてくる豊かな発想をし、遊びを自分たちで進めるんです。昨年度よりも、わくわくしながら子どもたちと遊んでいます。

園の先生

園で培われた力をどのようにつなげていけばよいのか意識するようになりました。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に着目することで、授業が変わります。今年は、校内研究へ取組を広げていきたいと思っています。

小学校の先生

保育・授業改善

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を一人ひとりの発達していく姿を捉える手掛かりとして、また、教師の関わりや環境の構成を改善・充実していくための視点として活用することで、学びや生活の質を高めていくことができます。

算数科「かたちあそび」

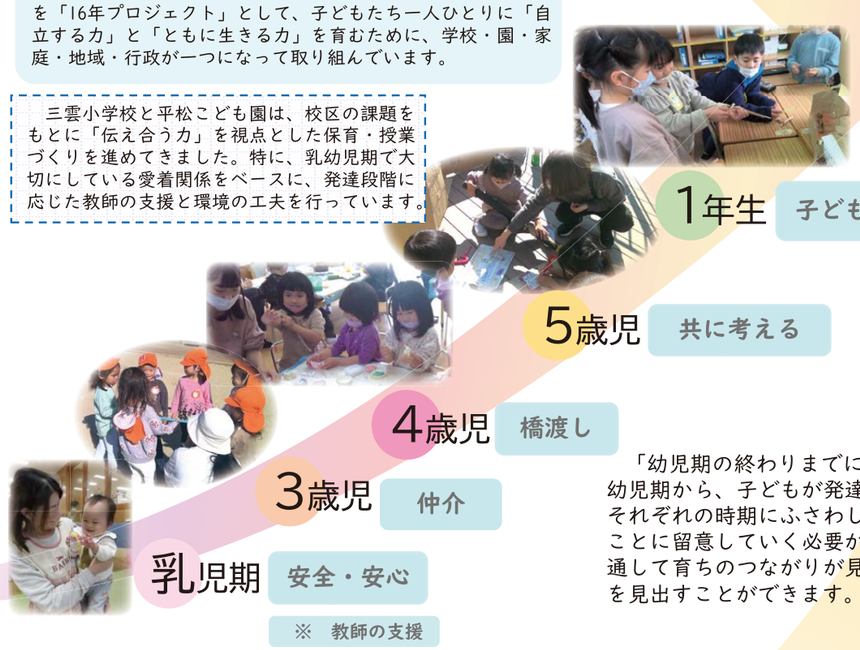
幼児期の経験を生かし、身の回りにあるものを使って活動することを通して、形の構成について考えました。「自立心」を念頭に置き、単元を工夫することで、目標に向かって、友だちと協同し、自分なりのやり方で課題を解決する姿が見られました。

協働

「協働」期待する子ども像に迫るために力を合わせる

日野町では、「命が宿ってから義務教育終了までの16年間」を「16年プロジェクト」として、子どもたち一人ひとりに「自立する力」と「ともに生きる力」を育むために、学校・園・家庭・地域・行政が一つになって取り組んでいます。

三雲小学校と平松こども園は、校区の課題をもとに「伝え合う力」を視点とした保育・授業づくりを進めてきました。特に、乳幼児期で大切にしている愛着関係をベースに、発達段階に応じた教師の支援と環境の工夫を行っています。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、乳幼児期から、子どもが発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意していく必要があります。子どもの姿を通して育ちのつながりが見えてくると、次の手立てを見出すことができます。

3　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を確認しましょう！

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、子どもに資質・能力が育まれている具体的な姿です。主に５歳児後半に見られる姿とされていますが、その時期に突然現れるものではありません。０歳から大学教育まで（大人まで）、一人ひとりの発達に応じて育まれていきます。

「知識及び技能の基礎」＝緑色・長破線
「思考力、判断力、表現力等の基礎」＝青色・短破線
「学びに向かう力、人間性等」＝ピンク色・一重線

「10の姿」についての考え方

★到達目標ではなく、方向目標であること
★１項目ずつ取り出して指導したり、評価したりするものではないこと
★全ての子どもに同じように見られるものではないこと
★それぞれの時期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、見られる姿であること

健康な心と体	幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
協同性	友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
言葉による伝え合い	先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

平成29年公示「幼稚園教育要領」、下線部は、無藤 隆 編著「10の姿プラス５・実践解説書」による。

学びのサイクルを意識しましょう

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児の自発的な活動としての遊びを通して、育まれていきます。そして、子どもの活動や遊びの様子には、いくつもの10の姿が絡まり合って現れます。

幼児が、心が動く様々なもの・人・こととの出会いの中で、主体的に遊びを繰り返し、充実感・満足感を味わい、また、心を動かすという学びを展開できるよう「学びのサイクル」を意識しながら指導することが大切です。

園は指導を行う際に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を考慮

サイクルを重ねる中で、
活動は発展していき
学びは深まっていき
資質・能力が培われていく
福井大学教職大学院 岸野麻衣 准教授 資料より

小学校では、幼児期に育まれてきたことを踏まえて、各教科等での学習につながるよう指導を工夫することが求められています。

一人ひとりの児童の学びは、一つの教科だけで成立するものではなく、様々な教科の学びが相互に関連付き、つながり合っています。児童が主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくことができるよう、小学校でも「学びのサイクル」を意識しながら指導することが大切です。

小学校は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導を工夫

次のページからは、0歳から7歳までの発達や学びのプロセスを示しています。これまでどのような力が育まれてきたのかをつかみ、一人ひとりの発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり、必要な援助を行ったりすることができるよう、御活用ください。

教師との信頼関係に　支えられた生活